

## グルジェフ「教えはなにを目指すのかとあなたは聞くのだが」 (ウスペンスキー『奇跡を求めて』6章より)

出席者:

あなたの教えが目指すものはなんなのですか？

グルジェフ:

私には私の目標がある。だが、それについては言わないでいるのを許してほしい。

いまのところ、私自身の目標は、あなたにとって意味をなさない。なぜなら、あなたがあなた自身の目標を持つことこそが大切だからだ。

[教えはなにを目指すのかとあなたは聞くが]教えにあれこれの目標を追求させるわけにはいかない。

教えというのは、それがなんであれもう自分の目標を持っている人に対して、それに到達するための最善の方法を教えるということにしかなりえない。

これはとても重要な点だ。人は自分で自分の目標を定めるまでは、「なにかをする」ことなどできない。始めることさえもできない。目標がないのに、なにをするというのか？ なにをするよりも先に、まず目標が必要だ。

別の出席者:

ですが、生存の目的というのは、このうえなく難解な哲学上の問題ではないですか。真っ先にこの問題を解くことをあなたは求めているようです。ですが、われわれはこの問題を解きたいからこそ、ここに来たのではないのでしょうか。それなのに、あらかじめこの問題を解いていなければいけないみたいです。この問題の答えを知っている人がいるとしたら、その人はもうすべてを知っているはずですよ。

グルジェフ:

あなたは私の言ったことを誤解した。

私は生存の目的をめぐる哲学的なことを言ったのではない。人はふつうそれを知らないし、いまのままに留まるなら、いつかそれを知るといってもありえない。それに、生存の目的はひとつではない。たくさんの目的がある。ありふれたやりかたでこの問題に答えるのは無理だし、そんなことは無益だ。

私はまったく別のことを言っていた。あなたがたの個人的な目標について尋ねていた。あなたの生きている理由を聞いたのではなく、あなたはなにを求めているのかを聞いた。

だれにも自分なりの目標があるはずだ。ある人は富、ある人は健康を求める。天国を求める人もいれば、大将になりたい人もいる。

私はこれに類することとして、あなたの目標について尋ねた。これに答えてくれたなら、われわれは同じ道を進んでいるのか、それともそうではないのか、告げることができる。

次にここに来るときまでに、自分の目標について言えるようになりなさい。

\* \* \*

ウス Pensキー:

私は七年前に自分の確固たる目標を定めました。私はそのとき、自分は未来を予知できるようになりたいと心を決めたのです。

私はこれをめぐる理論を研究し、未来を予知することはできるという結論に達しました。そして何度かは、未来を正確に予知することにほんとうに成功しています。

そこで私は、次のような結論に到達しました。人は未来を知るべきであり、人には未来を知る権利がある。先がわからないことには、人生の計画を立てられないではないかと。

私のなかで、これはいろいろなことと結び付いています。たとえば、自分にはあとどれほどの時間が残されているのか。この先、どれほどの時間が与えられているのか。つまり自分は何月何日の何時に死ぬのか。人はそれを知ることができ、知る権利があるのです。これを知らないで生きるというのはなんという屈辱かと、私はいつも思っていました。

そこであるとき決心したのです。こうしたことを知らないまま物事を始めるのは絶対にごめんだと。どんなことであれ、自分にはそれを終えるための時間が残されているのかどうかわからないのにそれを始めてなんになるのでしょうか？

[…中略…]

別の出席者:

われわれひとりひとりがこの先どうなるか、予知することはできないのですか？ 自分を相手にした取り組みで各自がどんな成果を得ることになるのか、始めるかいが果たしてあるのか？

グルジェフ:

そんなことは予知できない。集団としての人類の未来なら予想できるが。

調子の狂った個々の機械について、その未来を予想するのは不可能だ。それはしきりに方向を変える。さっきまではある方向に向かっていて、あなたはそれがどこに行くか計算する。だが、

五分後にはまったく別の方向に向かっていて、さきほどの計算はまったく間違っていたということになる。

だれかの未来を知りたいということだが、そのだれかというのは何者なのかというのがまず問題となる。自分の未来について知りたいならば、まず自分を知らなければならない。その後で、ほんとうに自分の未来を知りたいのか、そんなことを知ることには価値はあるのかと、改めて問い直すことができる。もしかしたら知らないほうがよいのではないかな。